ガドルフの百合

宮沢賢治

［表記について］

●底本に従い、ルビは小学校１・２年の学習配当漢字を除き、すべての漢字につけた。ただし、本ファイル中では、初出のみにつける方法とした。
●ルビは「《ルビ》」の形式で処理した。
●［※１～６］は、入力者の補注を示す。注はファイルの末尾にまとめた。

ハックニー馬［※1］のしっぽのような、巫戯(ふざ)けた楊(やなぎ)の並木(なみき)と陶製(とうせい)の白い空との下を、みじめな旅(たび)のガドルフは、力いっぱい、朝からつづけて歩いておりました。

それにただ十六哩(マイル)だという次(つぎ)の町が、まだ一向(いっこう)見えても来なければ、けはいもしませんでした。

（楊がまっ青に光ったり、ブリキの葉(は)に変(かわ)ったり、どこまで人をばかにするのだ。殊(こと)にその青いときは、まるで砒素(ひそ)をつかった下等(かとう)の顔料(えのぐ)［※2］のおもちゃじゃ

ないか。）

ガドルフはこんなことを考えながら、ぶりぶり憤って歩きました。

それに俄かに雲が重くなったのです。

（卑しいニッケルの粉だ。淫らな光だ。）

その雲のどこからか、雷の一切れらしいものが、がたっと引きちぎったような音をたてました。

（街道のはずれが変に白くなる。あそこを人がやって来る。いややって来ない。あすこを犬がよこぎった。いやよこぎらない。畜生。）

ガドルフは、力いっぱい足を延ばしながら思いまし

た。

　そして間もなく、雨と黄昏(たそがれ)とがいっしょに襲(おそ)いかかったのです。

　実(じつ)にはげしい雷雨(らいう)になりました。いなびかりは、まるでこんな憐(あわ)れな旅のものなどを漂白(ひょうはく)してしまいそう、並木の青い葉がむしゃくしゃにむしられて、雨のつぶと一緒(いっしょ)に堅(かた)いみちを叩(たた)き、枝(えだ)までがガリガリ引き裂(さ)かれて降(ふ)りかかりました。

（もうすっかり法則(ほうそく)がこわれた。何もかもめちゃくちゃだ。これで、も一度(いちど)きちんと空がみがかれて、星座(せいざ)がめぐることなどはまあ夢(ゆめ)だ。夢でなけぁ霧(きり)だ。

みずけむりさ。）

ガドルフはあらんかぎりすねを延(の)ばしてあるきながら、並木のずうっと向(むこ)うの方のぼんやり白い水明りを見ました。

（あすこはさっき曖昧(あいまい)な犬の居(い)たところだ。あすこが少ぅしおれのたよりになるだけだ。）

けれども間もなく全(まった)くの夜になりました。空のあっちでもこっちでも、雷(かなみり)が素敵(すてき)に大きな咆哮(ほうこう)をやり、電光のせわしいことはまるで夜の大空の意識(いしき)の明滅(めいめつ)のようでした。

道はまるっきりコンクリート製(せい)の小川のようになっ

てしまって、もう二十分と続けて歩けそうにもありませんでした。

その稲光りのそらぞらしい明りの中で、ガドルフは巨きなまっ黒な家が、道の左側に建っているのを見ました。

（この屋根は稜が五角で大きな黒電気石［※3］の頭のようだ。その黒いことは寒天だ。その寒天の中へ俺ははいる。）

ガドルフは大股に跳ねて、その玄関にかけ込みました。

「今晩は。どなたかお出でですか。今晩は。」

家の中はまっ暗で、しんとして返事をするものもなく、そこらには厚い敷物や着物などが、くしゃくしゃ散らばっているようでした。
（みんなどこかへ遁げたかな。噴火があるのか。噴火じゃない。ペストか。ペストじゃない。またおれはひとりで問答をやっている。あの曖昧な犬だ。とにかく廊下のはじででも、ぬれた着物をぬぎたいもんだ。）
　ガドルフは斯う頭の中でつぶやきまた唇で考えるようにしました。そのガドルフの頭と来たら、旧教会の朝の鐘のようにガンガン鳴っておりました。
長靴を抱くようにして急いで脱って、少しびっこを

引きながら、そのまっ暗なちらばった家にはね上って行きました。すぐ突（つ）きあたりの大きな室は、たしか階段（かいだん）室らしく、射（さ）し込（こ）む稲光りが見せたのでした。

　その室の闇（やみ）の中で、ガドルフは眼（め）をつぶりながら、まず重い外套（がいとう）を脱（ぬ）ぎました。そのぬれた外套の袖（そで）を引っぱるとき、ガドルフは白い貝殻（かいがら）でこしらえあげた、昼の楊の木をありありと見ました。ガドルフは眼をあきました。

（うるさい。ブリキになったり貝殻になったり。しかしまたこんな桔梗（ききょう）いろの背景（はいけい）に、楊の舎利（しゃり）［※４］がりんと立つのは悪（わる）くない。）

それは眼をあいてもしばらく消(き)えてしまいませんでした。

ガドルフはそれからぬれた頭や、顔をさっぱりと拭(ぬぐ)って、はじめてほっと息(いき)をつきました。

電光がすばやく射し込んで、床(ゆか)におろされて蟹(かに)のかたちになっている自分の背嚢(はいのう)をくっきり照(て)らしまっ黒な影(かげ)さえ落(おと)して行きました。

ガドルフはしゃがんでくらやみの背嚢をつかみ、手探(てさぐ)りで開(ひら)いて、小さな器械(きかい)の類(たぐい)にさわってみました。

それから少ししずかな心持(こころも)ちになって、足音をたてないように、そっと次の室にはいってみました。交(かわ)る

交(がわ)るさまざまの色の電光が射し込んで、床に置(お)かれた石膏像(せっこうぞう)や黒い寝台(しんだい)や引っくり返(かえ)った卓子(テーブル)やらを照らしました。

(ここは何かの寄宿舎(きしゅくしゃ)か。そうでなければ避病院(ひびょういん)か。とにかく二階にどうもまだ誰(だれ)か残(のこ)っているようだ。一ぺん見て来ないと安心(あんしん)ができない。)

ガドルフはしきいをまたいで、もとの階段室に帰り、それから一ぺん自分の背嚢につまずいてから、二階に行こうと段(だん)に一つ足をかけた時、紫(むらさき)いろの電光が、ぐるぐるするほど明るくさし込んで来ましたので、ガドルフはぎくっと立ちどまり、階段に落ちたまっ黒な

自分の影とそれから窓（まど）の方を一緒（いっしょ）に見ました。

　その稲光りの硝子（ガラス）窓から、たしかに何か白いものが五つか六つ、だまってこっちをのぞいていました。

（丈（たけ）がよほど低（ひく）かったようだ。どこかの子供（こども）が俺のように、俄かの雷雨で遁げ込んだのかも知れない。それともやっぱりこの家の人たちが帰って来たのだろうか。どうだかさっぱりわからないのが本統（ほんとう）だ。とにかく窓を開いて挨拶（あいさつ）しよう。）

　ガドルフはそっちへ進（すす）んで行ってガタピシの壊（こわ）れかかった窓を開きました。たちまち冷たい雨と風とが、ぱっとガドルフの顔をうちました。その風に半分声を

とられながら、ガドルフは叮寧に云いました。

「どなたですか。今晩は。どなたですか。今晩は。」

向うのぼんやり白いものは、かすかにうごいて返事もしませんでした。却って注文通りの電光が、そこら一面ひる間のようにしてくれたのです。

「ははは、百合の花だ。なるほど。ご返事のないのも尤もだ。」

ガドルフの笑い声は、風といっしょに陰気に階段をころげて昇って行きました。

けれども窓の外では、いっぱいに咲いた白百合が、十本ばかり息もつけない嵐の中に、その稲妻の八分

一秒（びょう）を、まるでかがやいてじっと立っていたのです。
それからたちまち闇が戻（もど）されて眩（まぶ）しい花の姿（すがた）は消えましたので、ガドルフはせっかく一枚（まい）ぬれずに残ったフラン［※5］のシャツも、つめたい雨にあらわせながら、窓からそとにからだを出して、ほのかに揺（ゆ）らぐ花の影を、じっとみつめて次の電光を待（ま）っていました。

　間もなく次の電光は、明るくサッサッと閃（ひら）めいて、庭（にわ）は幻燈（げんとう）のように青く浮（うか）び、雨の粒（つぶ）は美（うつく）しい楕円形（だえんけい）の粒になって宙（ちゅう）に停（とど）まり、そしてガドルフのいとしい花は、まっ白にかっと瞋（いか）って立ちました。

（おれの恋（こい）は、いまあの百合の花なのだ。いまあの百合の花なのだ。砕（くだ）けるなよ。）

それもほんの一瞬（いっしゅん）のこと、すぐに闇は青びかりを押（お）し戻（もど）し、花の像はぼんやりと白く大きくなり、みだれてゆらいで、時々は地面（じめん）までも屈（かが）んでいました。

そしてガドルフは自分の熱（ほて）って痛（いた）む頭の奥（おく）の、青黝（あおぐろ）い斜面（しゃめん）の上に、すこしも動（うご）かずかがやいて立つ、もう一むれの貝細工（かいざいく）の百合を、もっとはっきり見ておりました。たしかにガドルフはこの二むれの百合を、一緒に息をこらして見つめていました。

それもまた、ただしばらくのひまでした。

たちまち次の電光は、マグネシアの焔（ほのお）よりももっと明るく、菫外線（きんがいせん）［※6］の誘惑（ゆうわく）を、力いっぱい含（ふく）みながら、まっすぐに地面に落ちて来ました。

美しい百合の憤（いきどお）りは頂点（ちょうてん）に達（たっ）し、灼熱（しゃくねつ）の花弁（かべん）は雪よりも厳（いか）めしく、ガドルフはその凛（りん）と張（は）る音さえ聴（き）いたと思いました。

暗（やみ）が来たと思う間もなく、また稲妻が向うのぎざぎざの雲から、北斎（ほくさい）の山下白雨のように赤く這（は）って来て、触（ふ）れない光の手をもって、百合を擦（かす）めて過ぎました。

雨はますます烈（はげ）しくなり、かみなりはまるで空の爆破（ばくは）を企（くわだ）て出したよう、空がよくこんな暴（あば）れものを、

じっと構（かま）わないでおくものだと、不思議（ふしぎ）なようにさえガドルフは思いました。

その次の電光は、実に微（かす）かにあるかないかに閃（ひら）めきました。けれどもガドルフは、その風の微光（びこう）の中で、一本の百合が、多分とうとう華奢（きゃしゃ）なその幹（みき）を折（お）られて、花が鋭（するど）く地面に曲（まが）ってとどいてしまったことを察（さっ）しました。

そして全くその通り稲光りがまた新（あた）らしく落ちて来たときその気の毒（どく）ないちばん丈の高い花が、あまりの白い興奮（こうふん）に、とうとう自分を傷（きず）つけて、きらきら顫（ふる）うしのぶぐさの上に、だまって横（よこた）わるのを見たのです。

ガドルフはまなこを庭から室の闇にそむけ、丁寧（ていねい）にがたがたの窓をしめて、背嚢のところに戻って来ました。

そして背嚢から小さな敷布（しきふ）をとり出してからだにまとい、寒（さむ）さにぶるぶるしながら階段にこしかげ、手を膝（ひざ）に組み眼をつむりました。

それからたまらずまたたちあがって、手さぐりで床（ゆか）をさがし、一枚の敷物（しきもの）を見つけて敷布の上にそれを着（き）ました。

そして睡（ねむ）ろうと思ったのです。けれども電光があんまりせわしくガドルフのまぶたをかすめて過ぎ、飢（う）え

とつかれとが一しょにがたがた湧(わ)きあがり、さっきからの熱った頭はまるで舞踏(ぶとう)のようでした。

(おれはいま何をとりたてて考える力もない。ただあの百合は折(お)れたのだ。おれの恋は砕けたのだ。)ガドルフは思いました。

それから遠い幾山河(いくやまかわ)の人たちを、燈籠(とうろう)のように思い浮(うか)べたり、また雷の声をいつかそのなつかしい人たちの語(ことば)に聞いたり、また昼の楊がだんだん延びて白い空までとどいたり、いろいろなことをしているうちに、いつかとろとろ睡ろうとしました。そしてまた睡っていたのでしょう。

ガドルフは、俄かにどんどんどんという音をききました。ばたんばたんという足踏（あしぶ）みの音、怒号（どごう）や潮罵（ちょうば）が烈（はげ）しく起（おこ）りました。

そんな語はとても判（わか）りもしませんでした。ただその音は、たちまち格闘（かくとう）らしくなり、やがてずんずんガドルフの頭の上にやって来て、二人の大きな男が、組み合ったりほぐれたり、けり合ったり撲（なぐ）り合ったり、烈しく烈しく叫（さけ）んで現（あら）われました。

それは丁度奇麗（ちょうどきれい）に光る青い坂（さか）の上のように見えました。一人は闇の中に、ありありうかぶ豹（ひょう）の毛皮（けがわ）のだぶだぶの着物をつけ、一人は烏（からす）の王のように、まっ黒

くなめらかによそおっていました。そしてガドルフはその青く光る坂の下に、小さくなってそれを見上げてる自分のかたちも見たのです。

見る間に黒い方は咽喉（のど）をしめつけられて倒（たお）されました。けれどもすぐに跳ね返して立ちあがり、今度（こんど）はしたたかに豹の男のあごをけあげました。

二人はも一度組みついて、やがてぐるぐる廻（まわ）って上になったり下になったり、どっちがどっちかわからず暴れてわめいて戦（たたか）ううちに、とうとうすてきに大きな音を立てて、引っ組んだまま坂をころげて落ちて来ました。

ガドルフは急いでとび退（の）きました。それでもひどくつきあたられて倒れました。

そしてガドルフは眼を開いたのです。がたがた寒さにふるえながら立ちあがりました。

雷はちょうどいま落ちたらしく、ずうっと遠くで少しの音が思い出したように鳴（な）っているだけ、雨もやみ電光ばかりが空を亘（わた）って、雲の濃淡（のうたん）、空の地形図をはっきりと示し、また只（ただ）一本を除（のぞ）いて、嵐に勝（か）ちほこった百合の群（むれ）を、まっ白に照（て）らしました。

ガドルフは手を強く延ばしたり、またちぢめたりしながら、いそがしく足ぶみをしました。

窓の外の一本の木から、一つの雫が見えていました。それは不思議にかすかな薔薇いろをうつしていたのです。

（これは暁方の薔薇色ではない。南の蝎の赤い光がうつったのだ。その証拠にはまだ夜中にもならないのだ。雨さえ晴れたら出て行こう。街道の星あかりの中だ。次の町だってじきだろう。けれどもぬれた着物をまた引っかけて歩き出すのはずいぶんいやだ。いやだけれども仕方ない。おれの百合は勝ったのだ。）

　ガドルフはしばらくの間、しんとして斯う考えました。

●入力者注※1　ハックニー＝馬の種類。イギリス原産で、主に馬車用に使われた。
※2　顔料＝亜砒酸を使った、毒性の強いパリグリーン（エメラルドグリーン）を指す。
※3　黒電気石＝鉱石の1つ、「鉄電気石」を指す。ただし、角は六角。
※4　舎利＝本来は釈迦の骨。ここでは仏舎利塔を指す。
※5　フラン＝織物の1つ、フランネル。
※6　菫外線＝紫外線。

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店
　　１９９６（平成8）年６月25日発行改訂新版
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　１９９５（平成７）年５月発行
入力：浜野智
校正：浜野智
ファイル作成：浜野智
１９９９年2月5日公開
２００３年６月１日修正
青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で

作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。